

科目名		臨床神経科学											
科目名(英)													
単位数		1		時間数		15時間		担当者		片伯部裕次郎			
実施年度		2021年度		実施時期		後期 I		担当者実務経験		医師として病院に勤務			
対象学科・学年		言語聴覚学科 昼夜間部 1年											
授業概要		言語聴覚障害および言語聴覚臨床について学修するうえで臨床神経科学に関する知識、技能、態度を習得する。											
授業形式		講義： ○			演習：		実習：		実技：		※ 主たる方法：○ その他：△		
学習目標 (到達目標)	言語 情報	知的 技能	運動 技能	態度 意欲	その他	目標							
	○	○				中枢神経系疾患の病態、診断、治療について説明できる。							
	○	○				覚醒下脳手術について説明できる。							
	○	○				脳電気刺激法・脳磁気刺激法を使用した治療法について説明できる。							
	○	○				基本的な神経学的検査について説明できる。							
テキスト・教材 参考図書		医学書院 川平 和美：神経内科学 第5版（標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野）、 医歯薬出版株式会社 中島 雅美：理学療法士・作業療法士 PT・OT基礎から学ぶ 神経内科学ノート。											
授業計画	回数	授業項目・内容							授業外学修指示				
	1	意識障害の基本、感覚障害							教科書の該当範囲を事前に読み、わからない用語等は調べておくこと(30分)				
	2	脳血管障害(脳梗塞、脳出血、くも膜下出血、その他の脳血管障害)							教科書の該当範囲を事前に読み、わからない用語等は調べておくこと(30分)				
	3	頭部外傷、脳腫瘍							教科書の該当範囲を事前に読み、わからない用語等は調べておくこと(30分)				
	4	変性疾患(大脳基底核疾患、運動ニューロン疾患、脊髄小脳変性症、その他の変性疾患)							教科書の該当範囲を事前に読み、わからない用語等は調べておくこと(30分)				
	5	脱髄疾患、末梢神経障害							教科書の該当範囲を事前に読み、わからない用語等は調べておくこと(30分)				
	6	運動ニューロン疾患、筋疾患							教科書の該当範囲を事前に読み、わからない用語等は調べておくこと(30分)				
	7	覚醒下脳手術、脳電気刺激法・脳磁気刺激法							教科書の該当範囲を事前に読み、わからない用語等は調べておくこと(30分)				
	8	神経学的検査(意識、感覚・知覚、反射、筋力、筋トーン、筋萎縮、不随意運動、協調運動障害、自律運動障害等)							教科書の該当範囲を事前に読み、わからない用語等は調べておくこと(30分)				
	9												
	10												
	11												
	12												
	13												
	14												
	15												
評価方法	(1)定期試験(筆記)を実施する。 以上を下記の観点・割合で評価する。 成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。												
		言語情報		知的技能		運動技能		態度・意欲		その他		評価割合	
	定期試験(筆記試験)		○		○						100%		
	宿題・レポート												
	発表・作品												
履修上の注意													

科目名	臨床医学講座Ⅰ										
科目名(英)											
単位数	1		時間数	15時間		担当者	永江 信吾				
実施年度	2021年度		実施時期	後期Ⅰ		担当者実務経験	病院にて言語聴覚士として勤務				
対象学科・学年	言語聴覚学科 昼夜間部 1年										
授業概要	言語聴覚障害および言語聴覚臨床について学修する上で基礎となる人体のしくみ・疾患・ことばの成り立ちに関する知識を修得する。										
授業形式	講義: ○		演習:		実習:		実技:		※ 主たる方法:○ その他:△		
学習目標 (到達目標)	言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標					
	○	○				言語聴覚士の資格に求められる基礎的知識の水準を意識できる。					
	○	○				小項目分類ごとの過去問題から正しい答えを選択できる。					
	○	○				小項目分類ごとの過去問題を解説できる。					
テキスト・教材 参考図書	教科書: 医歯薬出版株式会社、2018 大森孝一ほか「言語聴覚士テキスト第3版」 参考図書: 国家試験過去問題集										
授業計画	回数	授業項目・内容					授業外学修指示				
	1	解剖生理学					事前に言語聴覚士テキストの該当部分を読み、わからないところをチェックしておく(1時間)				
	2	病理学					事前に言語聴覚士テキストの該当部分を読み、わからないところをチェックしておく(1時間)				
	3	内科学					事前に言語聴覚士テキストの該当部分を読み、わからないところをチェックしておく(1時間)				
	4	精神医学					事前に言語聴覚士テキストの該当部分を読み、わからないところをチェックしておく(1時間)				
	5	神経系医学					事前に言語聴覚士テキストの該当部分を読み、わからないところをチェックしておく(1時間)				
	6	生涯発達心理学					事前に言語聴覚士テキストの該当部分を読み、わからないところをチェックしておく(1時間)				
	7	言語発達学					事前に言語聴覚士テキストの該当部分を読み、わからないところをチェックしておく(1時間)				
	8	定期試験と解説					定期試験の振り返り学習をすること。(30分)				
	9										
	10										
	11										
	12										
	13										
	14										
	15										
評価方法	1) 定期試験(筆記)を実施する。 成績評価基準は、S(90点以上)・A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。										
			言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合			
	定期試験		○	○				100%			
	小テスト										
	宿題・レポート										
	発表・作品										
履修上の注意											

科目名	発達障害・SLIの理解						
科目名(英)							
単位数	1	時間数	15時間	担当者	永野 淳子		
実施年度	2021年度	実施時期	後期 I	担当者実務経験	小児施設にて心理担当として勤務		
対象学科・学年	言語聴覚学科 昼夜間部 1年						
授業概要	発達障害(自閉症スペクトラム障害、学習障害、注意欠如/多動性障害)、特異的言語発達障害の基本的概念と知識を習得する。 自閉症スペクトラム障害・学習障害・注意欠如/多動性障害のそれぞれの関連を学ぶ。						
授業形式	講義: ○	演習: △	実習:	実技:	※ 主たる方法:○ その他:△		
学習目標 (到達目標)	言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標	
	○	○				自閉症スペクトラム障害・学習障害・注意欠如/多動性障害、特異的言語発達障害の定義を説明できる	
	○	○				自閉症スペクトラム障害・学習障害・注意欠如/多動性障害、特異的言語発達障害の診断基準を説明できる	
	○	○				自閉症スペクトラム障害・学習障害・注意欠如/多動性障害、特異的言語発達障害の症状を説明できる	
	○	○		○		各疾患で言語発達障害が生じる原因と発症メカニズムを推論できる	
	○	○		○		当事者、家族、関係者の心理を概説できる	
テキスト・教材 参考図書	ミネルヴァ書房 ふしぎだね！？新版LD(学習障害)のおともだち						
授業計画	回数	授業項目・内容			授業外学修指示		
	1	発達障害の定義			該当箇所の予習および講義後の復習をしておくこと(30分)		
	2	発達障害の診断基準(DSM-5、ICD-11)			該当箇所の予習および講義後の復習をしておくこと(30分)		
	3	発達障害の言語領域の症状(語彙・文法、コミュニケーション)			該当箇所の予習および講義後の復習をしておくこと(30分)		
	4	発達障害の言語領域の症状(発声発語、読み書き、認知)			該当箇所の予習および講義後の復習をしておくこと(30分)		
	5	特異的言語発達障害の概要(定義と診断基準)			該当箇所の予習および講義後の復習をしておくこと(30分)		
	6	特異的言語発達障害の言語領域の症状			該当箇所の予習および講義後の復習をしておくこと(30分)		
	7	当事者、家族、関係者の心理の理解			事例検討資料の作成(60分)		
	8	定期試験			講座全体を振り返り、試験対策を行う(60分)		
	9						
	10						
	11						
	12						
	13						
	14						
	15						
評価方法	(1)レポートを数回実施する。(2)定期試験(筆記)を実施する。 以下を下記の観点・割合で評価する。 成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。						
		言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
	定期試験	○	○				70%
	小テスト						
	宿題・レポート				○		30%
	発表・作品						
履修上の注意							

科目名	音響学(聴覚心理学含む)										
科目名(英)											
単位数	1		時間数	30時間		担当者	井上 仁郎				
実施年度	2021年度		実施時期	後期 I		担当者実務経験					
対象学科・学年	言語聴覚学科 昼夜間部 1年										
授業概要	言語聴覚障害および言語聴覚臨床について学修する上で基礎となる言語とコミュニケーションに関する知識・技能・態度を修得する。										
授業形式	講義: ○		演習:		実習:		実技:		※ 主たる方法:○ その他:△		
学習目標 (到達目標)	言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標					
	○					音の物理的側面の基本的概念が説明できる					
	○					言語音の音響的特性を理解し、調音との関係を説明できる					
	○					音声知覚に関する基本概念と知識を説明できる					
テキスト・教材 参考図書	教科書:講談社、2014 青木直史「ゼロからはじめる音響学」										
授業計画	回数	授業項目・内容					授業外学修指示				
	1	波の一般的性質					講座を振り返りまとめ、繰り返し学習する(30分)				
	2	音の物理的性質:音圧、デシベル					講座を振り返りまとめ、繰り返し学習する(30分)				
	3	音の物理的性質:音響パワー、音の強さのレベル、音圧レベル					講座を振り返りまとめ、繰り返し学習する(30分)				
	4	音の物理的性質:音の伝搬と距離減衰、ドップラー効果					講座を振り返りまとめ、繰り返し学習する(30分)				
	5	音の大きさの知覚					講座を振り返りまとめ、繰り返し学習する(30分)				
	6	音の周波数分析:スペクトルとその表現					講座を振り返りまとめ、繰り返し学習する(30分)				
	7	音の高さの知覚					講座を振り返りまとめ、繰り返し学習する(30分)				
	8	電気音響機器					講座を振り返りまとめ、繰り返し学習する(30分)				
	9	アナログとデジタル					講座を振り返りまとめ、繰り返し学習する(30分)				
	10	マスキング					講座を振り返りまとめ、繰り返し学習する(30分)				
	11	臨界帯域と聴覚フィルタ					講座を振り返りまとめ、繰り返し学習する(30分)				
	12	両耳聴					講座を振り返りまとめ、繰り返し学習する(30分)				
	13	MLD、先行音効果					講座を振り返りまとめ、繰り返し学習する(30分)				
	14	聴覚心理学のまとめと補足					講座を振り返りまとめ、繰り返し学習する(30分)				
	15	定期試験					講座全体を振り返り学習をする(1時間)				
評価方法	1)定期試験(筆記)を実施する。 成績評価基準は、S(90点以上)・A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。										
			言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合			
	定期試験		○	○				100%			
	小テスト										
	宿題・レポート										
	発表・作品										
履修上の注意											

科目名	外科学系(耳鼻咽喉科学・形成外科学)									
科目名(英)										
単位数	1		時間数	30時間		担当者	増田孝・九大系			
実施年度	2021年度		実施時期	後期 I		担当者実務経験	医師として病院に勤務			
対象学科・学年	言語聴覚学科 昼夜間部 1年									
授業概要	言語聴覚障害および言語聴覚臨床について学修するうえで基礎となる人体のしくみと疾患・治療に関する知識・技能・態度を修得する。									
授業形式	講義: ○		演習:		実習:		実技:		※ 主たる方法:○ その他:△	
学習目標 (到達目標)	言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標				
	○					鼻・副鼻腔の構造と機能を説明できる				
	○					耳鼻咽喉科関連の疾患を概説できる				
	○					顔面や皮膚の成り立ちを理解し説明することができる				
	○					顔面・皮膚疾患について理解し、説明することができる				
テキスト・教材 参考図書	教科書:医学書院、2007 鳥山稔(編)「言語聴覚士のための基礎知識 耳鼻咽喉科学 第2版」									
授業計画	回数	授業項目・内容					授業外学修指示			
	1	鼻・副鼻腔の解剖、機能					授業内容を再度まとめ、必要事項を繰り返し学習する(30分)			
	2	鼻・副鼻腔の疾患					授業内容を再度まとめ、必要事項を繰り返し学習する(30分)			
	3	外耳の疾患					授業内容を再度まとめ、必要事項を繰り返し学習する(30分)			
	4	中耳の疾患					授業内容を再度まとめ、必要事項を繰り返し学習する(30分)			
	5	内耳の疾患					授業内容を再度まとめ、必要事項を繰り返し学習する(30分)			
	6	頭頸部外科の解剖、疾患					授業内容を再度まとめ、必要事項を繰り返し学習する(30分)			
	7	定期試験					授業内容を再度まとめ、必要事項を繰り返し学習する(30分)			
	8	形成外科総論					授業内容を再度まとめ、必要事項を繰り返し学習する(30分)			
	9	口唇裂					授業内容を再度まとめ、必要事項を繰り返し学習する(30分)			
	10	口蓋裂					授業内容を再度まとめ、必要事項を繰り返し学習する(30分)			
	11	頭蓋、顔面の先天異常					授業内容を再度まとめ、必要事項を繰り返し学習する(30分)			
	12	頭頸部外科に伴う障害					授業内容を再度まとめ、必要事項を繰り返し学習する(30分)			
	13	瘢痕とケロイド					授業内容を再度まとめ、必要事項を繰り返し学習する(30分)			
	14	組織移植					授業内容を再度まとめ、必要事項を繰り返し学習する(30分)			
	15	定期試験					授業内容を再度まとめ、必要事項を繰り返し学習する(30分)			
評価方法	(1)定期試験(筆記)を実施する。 以上を下記の観点・割合で評価する。 成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。									
		言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合			
	定期試験	○	○				100%			
	宿題・レポート									
	発表・作品									
履修上の注意										

科目名	呼吸発声発語系医学										
科目名(英)											
単位数	1		時間数	30時間		担当者	灘吉 享子				
実施年度	2021年度		実施時期	後期 I		担当者実務経験	病院にて言語聴覚士として勤務				
対象学科・学年	言語聴覚学科 昼夜間部 1年										
授業概要	言語聴覚士に必要な呼吸機能に関わる、解剖の知識を修得し、そのメカニズムについて結びつけることができる。そして、基本的な意識をもって、呼吸リハビリテーションについて考える基礎をつくる。										
授業形式	講義: ○		演習:		実習:		実技:		※ 主たる方法:○ その他:△		
学習目標 (到達目標)	言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標					
	○	○				呼吸器系の基本構造と機能が説明できる。					
	○	○				呼吸器系の疾患の名称を列挙できる。					
	○	○				呼吸器系の疾患の特徴を概説できる。					
	○	○				呼吸器系の疾患の特徴を概説できる。					
				○	○	サンプルCD聴取によりそれぞれの疾患の症状がイメージできる					
テキスト・教材 参考図書	教科書: 医学書院 言語聴覚士のための基礎知識 耳鼻咽喉科学第2版 参考書: 医歯薬出版株式会社 言語聴覚士テキスト										
授業計画	回数	授業項目・内容					授業外学修指示				
	1	呼吸発声発語概要と呼吸器系の基本構造					教科書・配布プリントをもとに復習する。小テストへの取り組みを行う。(30分)				
	2	呼吸器系の呼吸運動について					教科書・配布プリントをもとに復習する。小テストへの取り組みを行う。(30分)				
	3	呼吸器の解剖と検査					教科書・配布プリントをもとに復習する。小テストへの取り組みを行う。(30分)				
	4	呼吸訓練の実際					教科書・配布プリントをもとに復習する。小テストへの取り組みを行う。(30分)				
	5	喉頭の基本構造					教科書・配布プリントをもとに復習する。小テストへの取り組みを行う。(30分)				
	6	喉頭の機能					教科書・配布プリントをもとに復習する。小テストへの取り組みを行う。(30分)				
	7	喉頭の検査					教科書・配布プリントをもとに復習する。小テストへの取り組みを行う。(30分)				
	8	構音器官の基本構造					教科書・配布プリントをもとに復習する。小テストへの取り組みを行う。(30分)				
	9	構音器官の機能					教科書・配布プリントをもとに復習する。小テストへの取り組みを行う。(30分)				
	10	1～9のまとめテスト/国家試験問題					解説づくりをする(30分)				
	11	疾患(呼吸器)					教科書・配布プリントをもとに復習する。小テストへの取り組みを行う。(30分)				
	12	疾患(喉頭)/サンプルCDの聴取					教科書・配布プリントをもとに復習する。小テストへの取り組みを行う。(30分)				
	13	疾患(付属管腔)/サンプルCDの聴取					教科書・配布プリントをもとに復習する。小テストへの取り組みを行う。(30分)				
	14	症例検討					教科書・配布プリントをもとに復習する。小テストへの取り組みを行う。(30分)				
	15	10～13のまとめテスト/国家試験問題					解説づくりをする(30分)				
評価方法	(1)定期試験(筆記)を実施する。(2)小テストを実施する(3)レポート課題をもとめる 以上を下記の観点・割合で評価する。 成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。										
		言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合				
	定期試験(筆記)	◎	◎				70%				
	小テスト	○	○				15%				
	宿題・レポート		○		○		10%				
	質問・取り組み				○	○	5%				
履修上の注意											

科目名		聴覚系医学										
科目名(英)												
単位数		1		時間数		30時間		担当者		星子 隆裕		
実施年度		2021年度		実施時期		後期 I		担当者実務経験		言語聴覚士として病院に勤務		
対象学科・学年		言語聴覚学科 昼夜間部 1年										
授業概要		言語聴覚障害および言語聴覚臨床について学修する上で基礎となる人体のしくみ・疾病と治療に関する知識・技能・態度を修得する。										
授業形式		講義: ○		演習:		実習:		実技:		※ 主たる方法:○ その他:△		
学習目標 (到達目標)		言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標					
		○	○				聴覚器のの構造と機能を説明できる。					
		○	○				聴覚検査を列挙し、それぞれの概要を説明できる。					
		○	○				聴覚系の疾患の名称を列挙できる。					
		○	○				聴覚系の疾患の特徴を概説できる。					
					○	○	授業時に質問ができる。課外学習の取り組みがある。					
テキスト・教材 参考図書		教科書:病気が見える 耳鼻咽喉科 参考文献:南山堂 日本言語聴覚医学会「聴覚検査の実際 第3版」 医学書院 言語聴覚士テキスト 言語聴覚士のための基礎知識 耳鼻咽喉科学										
授業計画		回数	授業項目・内容						授業外学修指示			
		1	聴覚系リハビリテーション概論						授業資料、テキストを基に小テストに向けて学習をする(1時間)Classiによる課題			
		2	外耳と中耳の構造と機能						授業資料、テキストを基に小テストに向けて学習をする(1時間)Classiによる課題			
		3	中耳と内耳の構造と機能						授業資料、テキストを基に小テストに向けて学習をする(1時間)Classiによる課題			
		4	伝音機構と感音機構のまとめ						授業資料、テキストを基に小テストに向けて学習をする(1時間)レポート「音を受容するまでの流れ」(1時			
		5	平衡機能と他器官の関連						授業資料、テキストを基に小テストに向けて学習をする(1時間)Classiによる課題			
		6	聴覚系の病態						授業資料、テキストを基に小テストに向けて学習をする(1時間)Classiによる課題			
		7	基本的な自覚的聴覚検査						授業資料、テキストを基に小テストに向けて学習をする(1時間)Classiによる課題			
		8	内耳機能検査						授業資料、テキストを基に小テストに向けて学習をする(1時間)Classiによる課題			
		9	診断的な自覚的聴覚検査・聞こえの評価						授業資料、テキストを基に小テストに向けて学習をする(1時間)Classiによる課題			
		10	他覚的聴覚検査						授業資料、テキストを基に小テストに向けて学習をする(1時間)Classiによる課題			
		11	聴覚発達と小児聴覚検査						Classiによる課題 レポート「検査の選択基準」			
		12	先天性疾患						授業資料、テキストを基に小テストに向けて学習をする(1時間)Classiによる課題			
		13	後天性疾患						授業資料、テキストを基に小テストに向けて学習をする(1時間)Classiによる課題			
		14	聴覚のリハビリテーション						授業資料、テキストを基に小テストに向けて学習をする(1時間)Classiによる課題			
		15	定期試験と解説						誤った問題について振り返り学習をする			
評価方法		(1)授業の中で小テストを5回実施する。(2)レポートを数回実施する。(3)定期試験(筆記)を実施する。(4)授業時の質問や取り組み 以上を下記の観点・割合で評価する。 成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。										
			言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合				
		定期試験(筆記)	◎	◎				70%				
		小テスト	○	○				15%				
		宿題・レポート		○		○		10%				
		質問・取り組み				○	○	5%				
履修上の注意		まとめ課題レポートあり。小テスト評価に含む。										

科目名	学習・認知心理学									
科目名(英)										
単位数	1		時間数	30時間		担当者	大森 晶子			
実施年度	2021年度		実施時期	後期Ⅰ		担当者実務経験	言語聴覚士として施設に勤務			
対象学科・学年	言語聴覚学科 昼夜間部 1年									
授業概要	人間の認知に関する感覚、知覚、注意、記憶、言語、知識、思考などについて学習する。									
授業形式	講義: ○		演習: △	実習:		実技:	※ 主たる方法:○ その他:△			
学習目標 (到達目標)	言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標				
	○	△				感覚・知覚・認知過程の基本概念と主要理論を説明できる				
	○	△				思考・知識の表象、構造と主要理論を説明できる				
	○	△				感覚・情動・動機づけの基本概念と主要理論を説明できる				
	○	△				学習の基本概念と主要理論を説明できる				
テキスト・教材 参考図書	・サイエンス社 学習の心理 行動のメカニズムを探る									
授業計画	回数	授業項目・内容					授業外学修指示			
	1	学習認知心理学の概要～心理学領域内での位置づけ～					教科書の該当範囲を事前に読み、わからない用語等は調べておくこと(1時間)			
	2	感覚(感覚の種類、感覚可動範囲と感度、物理量と心理量)					教科書の該当範囲を事前に読み、わからない用語等は調べておくこと(1時間)			
	3	感覚(感覚モダリティと感覚の統合、順応と対比)					教科書の該当範囲を事前に読み、わからない用語等は調べておくこと(1時間)			
	4	知覚・認知(色彩感覚、奥行き知覚、図地弁別と形態知覚)					感覚についてまとめておくこと、教科書の該当範囲の予習をすること			
	5	知覚・認知(運動知覚、知覚恒常性、運動協応)					教科書の該当範囲を事前に読み、わからない用語等は調べておくこと(1時間)			
	6	知覚・認知(認知地図、対人認知、感覚遮断)					教科書の該当範囲を事前に読み、わからない用語等は調べておくこと(1時間)			
	7	学習(古典的条件づけとオペラント条件づけ)					知覚・認知についてまとめておくこと、教科書の該当範囲の予習をすること			
	8	学習(強化)					教科書の該当範囲を事前に読み、わからない用語等は調べておくこと(1時間)			
	9	学習(弁別学習、技能学習、社会的学習)					教科書の該当範囲を事前に読み、わからない用語等は調べておくこと(1時間)			
	10	学習(学習の転移と動機づけ、要求水準)					教科書の該当範囲を事前に読み、わからない用語等は調べておくこと(1時間)			
	11	記憶(記憶過程、短期記憶と長期記憶)					学習についてまとめておくこと、教科書の該当範囲の予習をすること			
	12	記憶(記憶範囲、記憶容量、忘却)					教科書の該当範囲を事前に読み、わからない用語等は調べておくこと(1時間)			
	13	思考(問題解決、概念形成と概念の獲得、概念の構造)					記憶についてまとめておくこと、教科書の該当範囲の予習をすること			
	14	思考(象徴、イメージ、スキーマ、推理)					記憶についてまとめておくこと、教科書の該当範囲の予習をすること			
	15	定期試験					定期試験対策のまとめを作成すること			
評価方法	(1)授業の中で小テストを5回実施する。(2)レポートを数回実施する。(3)定期試験(筆記)を実施する。 以上を下記の観点・割合で評価する。 成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。									
		言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合			
	定期試験(筆記)	◎	○				80%			
	小テスト	◎	◎				10%			
	レポート	○	◎				10%			
履修上の注意										

科目名	地域言語聴覚療法									
科目名(英)										
単位数	1		時間数	30時間		担当者	永江 信吾			
実施年度	2021年度		実施時期	後期 I		担当者実務経験	病院にて言語聴覚士として勤務			
対象学科・学年	言語聴覚学科 昼夜間部 1年									
授業概要	言語聴覚障害および言語聴覚臨床について学修する上で基礎となる社会福祉、リハビリテーションに関する基本的知識を修得する。									
授業形式	講義： ○		演習： ○		実習：		実技：		※ 主たる方法：○ その他：△	
学習目標 (到達目標)	言語 情報	知的 技能	運動 技能	態度 意欲	その他	目標				
	○	○				地域リハビリテーションの社会的背景と意義を説明できる。				
	○	○				成人・高齢者の地域生活への支援を説明できる。				
	○	○				地域包括ケアシステムでの言語聴覚士の役割について説明できる。				
	○	○		○		地域住民に向けて、講座を模擬的に開催することができる				
	○	○		○		居住地の地域資源について調査し、レポートを提出することができる				
テキスト・教材 参考図書	教科書：医学書院、2019 藤田郁代(監)「標準言語聴覚障害学 地域言語聴覚療法学」									
授業計画	回数	授業項目・内容					授業外学修指示			
	1	地域リハビリテーションの社会的背景と意義					教科書や配布資料を読み返す(30分)			
	2	地域言語聴覚療法の特徴					教科書や配布資料を読み返す(30分)			
	3	地域言語聴覚療法を支えるシステムと制度					教科書や配布資料を読み返す(30分)			
	4	地域言語聴覚療法の展開					教科書や配布資料を読み返す(30分)			
	5	地域言語聴覚療法におけるサービス-通所-					教科書や配布資料を読み返す(30分)			
	6	地域言語聴覚療法におけるサービス-入所-					教科書や配布資料を読み返す(30分)			
	7	災害リハビリテーションとは？					教科書や配布資料を読み返す(30分)			
	8	コミュニケーション機器による支援					教科書や配布資料を読み返す(30分)			
	9	地域言語聴覚療法の実際-先輩言語聴覚士から話をきく-通所					教科書や配布資料を読み返す(30分)			
	10	地域言語聴覚療法の実際-先輩言語聴覚士から話をきく-入所					教科書や配布資料を読み返す(30分)			
	11	健康講座を開催してみよう！（立案）					健康講座の内容を考え、セッションを考える			
	12	健康講座を開催してみよう！（発表）					グループ発表を行い、振り返りを行う 次回の課題について、対象地域を決めておく			
	13	地域を知る-地域資源を調べてみよう-（作成）					PCを使って調査を行う			
	14	地域を知る-地域資源を調べてみよう-（発表）					発表を行い、課題に対しての気づきをまとめる			
	15	定期試験					講座全体を振り返り、学修する（1時間）			
評価方法	(1)レポートを数回実施する。(2)定期試験(筆記)を実施する。 以下を下記の観点・割合で評価する。 成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。									
		言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合			
	定期試験	○	○				50%			
	小テスト	○	○				10%			
	宿題・レポート				○		40%			
	発表・作品									
履修上の注意										

科目名		失語・高次脳機能障害の展開					
科目名(英)		Deployment of Aphasia and Higher brain dysfunction General remarks					
単位数	1	時間数	30時間	担当者	小川 春美		
実施年度	2021年度	実施時期	後期 I	担当者実務経験	病院にて言語聴覚士として勤務		
対象学科・学年		言語聴覚学科 昼夜間部 1年生					
授業概要		失語症と高次脳機能障害の評価や訓練に関する基礎知識を習得する。 失語症や高次脳機能障害のリハビリテーションにおける職種連携について学ぶ。 失語症や高次脳機能障害関連の文献抄読を通して、言語聴覚療法における訓練・指導・支援や地域社会とのかかわりについて考える。					
授業形式	講義:	○	演習:	実習:	実技:	※ 主たる方法:○ その他:△	
学習目標 (到達目標)	言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標	
	○	○				失語症と高次脳機能障害の評価の目的や評価の流れについて説明できる。	
	○	○				失語症と高次脳機能障害の評価の際に収集する情報や検査方法を挙げることができる。	
	○	○		○		失語症と高次脳機能障害のリハビリテーションについて、関連の文献を探索し、概要を説明できる。	
	○	○		○		国家試験の問題に取り組み説明することが出来る。	
テキスト・教材 参考図書		テキスト: 文光堂 2015 網本和 高次脳機能障害ABC、 秀和システム 2012 和田義明 やさしくわかる 高次脳機能障害、 参考図書: 医学書院 2021 藤田郁代 標準言語聴覚障害学 失語症 医学書院 2021 藤田郁代 標準言語聴覚障害学 高次脳機能障害学					
授業計画	回数	授業項目・内容				授業外学修指示	
	1	言語聴覚療法の評価の目的と流れ				テキストの該当項を30分読んでおく。	
	2	失語症 高次脳機能障害の評価の原則				資料、テキストの該当項を30分復習しておく。 Classiで確認テストを実施するので、復習しておく	
	3	関連障害の評価や対応法について				資料、テキストの該当項を30分復習しておく。 Classiで確認テストを実施するので、復習しておく	
	4	情報収集の種類				資料、テキストの該当項を30分復習しておく。 Classiで確認テストを実施するので、復習しておく	
	5	情報収集 観察の方法				資料、テキストの該当項を30分復習しておく。 Classiで確認テストを実施するので、復習しておく	
	6	言語面の情報 スクリーニング検査				資料、テキストの該当項を30分復習しておく。 Classiで確認テストを実施するので、復習しておく	
	7	言語面の情報 掘り下げ検査				資料、テキストの該当項を30分復習しておく。 中間期の小テストを実施するので、復習しておく	
	8	情報収集 医学面 社会面 関連情報について				資料、テキストの該当項を30分復習しておく。 Classiで確認テストを実施するので、復習しておく	
	9	情報の統合 評価のまとめ				資料、テキストの該当項を30分復習しておく。 Classiで確認テストを実施するので、復習しておく	
	10	問題点の抽出と目標設定				資料、テキストの該当項を30分復習しておく。 Classiで確認テストを実施するので、復習しておく	
	11	失語症と高次脳機能障害 言語聴覚療法の理論と技法				資料、テキストの該当項を30分復習しておく。 Classiで確認テストを実施するので、復習しておく	
	12	失語症と高次脳機能障害のリハビリテーション 訓練から支援				資料、テキストの該当項を30分復習しておく。 Classiで確認テストを実施するので、復習しておく	
	13	失語症と高次脳機能障害のリハビリテーション 地域との連携				資料、テキストの該当項を30分復習しておく。	
	14	失語症と高次脳機能障害のリハビリテーション 症例検討				資料、テキストの該当項を30分復習しておく。	
15	まとめ				定期試験に向け、資料、テキスト、Classi、小テストの内容を30分確認し、復習しておく		
評価方法	(1)授業の中で小テスト1回(中間期)、クランチーを10回実施する。(2)レポートを数回実施する。(3)定期試験(筆記)を実施する。以上を下記の観点・割合で評価する。 成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。						
		言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
	定期試験	○	○				70%
	小テスト・クランチー	○	○		○		20%
	レポート・発表	○	○		○		10%
履修上の注意							

科目名	失語症の理解						
科目名(英)	realization of aphasia						
単位数	1		時間数	30時間	担当者	高津原 直樹	
実施年度	2021年度		実施時期	後期Ⅰ	担当者実務経験	病院にて言語聴覚士として勤務	
対象学科・学年	言語聴覚学科 昼夜間部 1年						
授業概要	・基本的な失語症についての定義、知識を習得する。 ・失語症古典的分類におけるそれぞれの特徴を把握し、鑑別する。 ・言語症状を認知神経心理学的モデルにあてはめて考え、その発現機序を説明する。 ・総合的失語症検査(SLTA)をマニュアルを見ながら実施する。						
授業形式	講義: ○		演習: △	実習:	実技: ○	※ 主たる方法:○ その他:△	
学習目標 (到達目標)	言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標	
	○	○				失語症の定義について説明することができる。	
	○	○				失語症の古典的タイプ分類ができる。	
	○	○				失語症と近縁症状との鑑別ができる。	
	○	○				失語症の各タイプの代表的な特徴を、何も見ずに列挙できる。	
			○	○		失語症総合的検査(SLTA)を模擬的に実施できる。	
テキスト・教材 参考図書	・新興医学出版社 小嶋 知幸著 なるほど失語症の評価と治療 SLTA 標準失語症検査 マニュアル ・医学書院 藤田 郁代著 失語症学第2版 ・医歯学出版株式会社 大森 孝一、永井千代子著 言語聴覚士テキスト第3版						
授業計画	回数	授業項目・内容				授業外学修指示	
	1	失語症の定義 原因疾患、責任病巣				Formsで小テスト『失語症の責任病巣』を実施(5択×5問)。30分	
	2	失語症の症状①(聴覚的理解) 語音認知障害、単語理解障害、統語理解障害				①語音認知障害②音韻的誤り③意味的誤りにについて具体例を挙げレポートを提出。60分	
	3	失語症の症状②(発話)喚語障害、錯語、新造語、ジャルゴン、統語障害、再帰性発話、復唱、近縁症状				様々な錯語の違いについて、各1つずつ具体例を挙げたレポートを提出。60分	
	4	失語症の症状③(読解、音読、書字) 漢字と仮名の違い、錯書、失書				Formsで小テスト『読解、音読、書字』を実施(5択×5問)。30分	
	5	認知神経心理学的モデルの活用 聴覚的理解、読解				単語を学習し、それを聞いて理解できるまでのメカニズムを図式化して提出。60分	
	6	認知神経心理学的モデルの活用 呼称、語想起、復唱、書字、書取				復唱の4経路を認知神経心理学的モデルにあてはめて解説できるようになっておく。30分	
	7	失語症の古典的分類とその鑑別点 8つの古典的分類				8つの古典的分類の図表を何も見ないで描いて提出。30分	
	8	ブローカ失語 ウェルニッケ失語				Formsで小テスト『ブローカ失語、ウェルニッケ失語』を実施(5択×5問)。30分	
	9	全失語 健忘失語、伝導失語				Formsで小テスト『全失語、健忘失語、伝導失語』を実施(5択×5問)。30分	
	10	超皮質性失語(感覚性、運動性、混合性)				Formsで小テスト『超皮質性失語』を実施(5択×5問)。30分	
	11	その他の失語症候群 語義失語、皮質下性失語、原発性進行性失語				Formsで小テスト『その他の失語症候群』を実施(5択×5問)。30分	
	12	小児失語症の原因疾患 純粋型(純粋語彙、純粋発語失行、純粋語啞)				Formsで小テスト『小児失語症』を実施(5択×5問)。30分	
	13	純粋型 (純粋失読、純粋失書、失読失書)				Formsで小テスト『小児失語症』を実施(5択×5問)。30分	
	14	失語症者へのインタビュー面接とスクリーニング検査				スクリーニング検査動画を見ながら自宅で練習 60分以上	
	15	スクリーニング検査実技テスト				定期試験に向けた勉強をしておくこと。120分以上	
評価方法	(1)授業の中で小テストを8回実施する。(2)レポートを3回実施する。(3)定期試験(筆記・実技)を実施する。 以上を下記の観点・割合で評価する。 成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。						
		言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
	定期試験(筆記)	○	○				60%
	実技テスト	○	○	○	○		20%
	小テスト・レポート	○	○				20%
履修上の注意	SLTA 標準失語症検査 マニュアル						

科目名	機能性構音障害の理解と展開										
科目名(英)											
単位数	1		時間数	30時間		担当者	梶原智津				
実施年度	2021年度		実施時期	後期Ⅰ		担当者実務経験	施設にて言語聴覚士として勤務				
対象学科・学年	言語聴覚学科 昼夜間部 1年										
授業概要	機能性構音障害の基礎知識、構音検査の実施と分析方法を習得する、系統的構音訓練の枠組みを知り立案・実施・評価を実践できる力を身につける。関連分野の理論的背景、エビデンスに基づく臨床思考を身につける。										
授業形式	講義：○		演習：		実習：		実技：		※ 主たる方法：○ その他：△		
学習目標 (到達目標)	言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標					
	○	○				過去の履修した音声学の知識を構音障害臨床との関連について説明できる。					
	○	○				機能性構音障害の定義とその症状について説明することができる。					
	○	○	○			機能性構音障害に関わる検査を選択することができ遂行することができる。					
	○	○	○			訓練プログラムの概要を理解し説明することができる。					
	○	○	○			それぞれの訓練内容におけるPLAN・DO・SEEの過程を実行することができる。					
テキスト・教材 参考図書	・医学書院 音声表記・音素表記 記号の使い方ハンドブック ・医学書院 標準言語聴覚障害学「発声発語障害学」 参考文献：改訂版 機能性構音障害 改訂第3版 聴覚言語療法臨床マニュアル										
授業計画	回数	授業項目・内容					授業外学修指示				
	1	音声学・音韻論と臨床の接点					指定教科書と過去の音声学の教科書および配布プリントを使用し復習しておく				
	2	発達途上の小児の構音障害					教科書と配布プリントを使用し復習しておく				
	3	演習)構音類似運動検査					自主演習しておく				
	4	演習)構音検査、結果のまとめと分析					自主演習および配布プリントを使用し復習しておく				
	5	系統的構音訓練の枠組み					自主演習および配布プリントを使用し復習しておく				
	6	演習)構音訓練の立案・実施・評価(単音～単音節レベル)					自主演習および配布プリントを使用し復習しておく				
	7	演習)構音訓練の立案・実施・評価(連続音節レベル①教材の留意点)					自主演習および配布プリントを使用し復習しておく				
	8	演習)構音訓練の立案・実施・評価(連続音節レベル②実施の留意点)					自主演習および配布プリントを使用し復習しておく				
	9	演習)構音訓練の立案・実施・評価(単語レベル)					自習演習および配布プリントを使用して復習しておく				
	10	演習)構音訓練の立案・実施・評価(句・短文レベル)					自主演習および配布プリントを使用して復習しておく				
	11	演習)構音訓練の立案・実施・評価(句・短文レベル)					自習演習および配布プリントを使用して復習しておく				
	12	演習)構音訓練の立案・実施・評価(般化アプローチ)					自主演習および配布プリントを使用して復習しておく				
	13	異常構音への対応					配布プリントを使用して復習しておく				
	14	音声知覚・音韻処理について					配布プリントを使用して復習しておく				
	15	まとめ					配布プリントを使用して復習しておく				
評価方法	(1)授業の中で小テストを5回実施する。(2)定期試験(筆記)を実施する。 以上を下記の観点・割合で評価する。 成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。										
		言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合				
	定期試験(筆記)	○	○				85%				
	小テスト	○	○				15%				
履修上の注意											

科目名	運動障害性構音障害の理解										
科目名(英)											
単位数	1		時間数	30時間		担当者	灘吉 恭子				
実施年度	2021年度		実施時期	後期 I		担当者実務経験	病院にて言語聴覚士として勤務				
対象学科・学年	言語聴覚学科 2年										
授業概要	1)構音運動のメカニズムについて理解し説明できる。2)構音障害の特徴について理解し、運動障害性構音障害の診断と分類ができる。3)言語聴覚士に必要なふるまいやコミュニケーション態度、学習能力の基礎を築き、個人 の課題を具体的にみつけることができる。										
授業形式	講義: ○		演習: △		実習:		実技:		※ 主たる方法:○ その他:△		
学習目標 (到達目標)	言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目 標					
	○	○				運動障害性構音障害の発生機序を説明するために、構造と機能を説明することができる。					
	○	○				運動障害性構音障害の病態について説明できる。構音障害の発現機序を説明できる。					
		○				運動障害性構音障害について、一般情報収集から問診および検査について説明できる。					
				○		言語聴覚士としてのふるまいについてイメージをもち、態度に反映することができる。					
				○	○	授業において疑問に思うことができ、問題解決のために質問に結びつけることができる。					
テキスト・教材 参考図書	教科書:インテルナ出版 ディサースリア臨床標準テキスト 西尾 正輝著 医歯薬出版株式会社 運動障害性構音障害学 廣瀬 肇 他 著										
授業計画	回数	授業項目・内容					授業外学修指示				
	1	構音障害の概念と分類／運動障害性構音障害とは					教科書および講義資料について復習し、小テストに取り組む				
	2	運動系の基礎理解(運動系の概要・錐体路・錐体外路)					教科書および講義資料について復習し、小テストに取り組む				
	3	運動系の基礎理解(小脳系・下位運動ニューロン・筋系)					教科書および講義資料について復習し、小テストに取り組む				
	4	運動系の基礎理解(発声発語器官の構造および筋肉の働き)					教科書および講義資料について復習し、小テストに取り組む				
	5	運動系の障害(錐体路・錐体外路)とその症状					教科書および講義資料について復習し、小テストに取り組む／インターネット等を利用し症状を画像的に確認				
	6	運動系の障害(小脳系)とその症状					教科書および講義資料について復習し、小テストに取り組む／インターネット等を利用し症状を画像的に確認				
	7	運動系の障害(下位運動ニューロン)とその症状					教科書および講義資料について復習し、小テストに取り組む／インターネット等を利用し症状を画像的に確認				
	8	運動障害性構音障害のタイプと原因疾患・発話特徴(弛緩性・混合性)					教科書および講義資料について復習し、小テストに取り組む／サンプルCDの聴取実施				
	9	運動障害性構音障害のタイプと原因疾患・発話特徴(UUMN・痙性)					教科書および講義資料について復習し、小テストに取り組む／サンプルCDの聴取実施				
	10	運動障害性構音障害のタイプと原因疾患・発話特徴(失調性)					教科書および講義資料について復習し、小テストに取り組む／サンプルCDの聴取実施				
	11	運動障害性構音障害のタイプと原因疾患・発話特徴(運動低下性)					教科書および講義資料について復習し、小テストに取り組む／サンプルCDの聴取実施				
	12	運動障害性構音障害の評価(概要・言語病理学的診断)					教科書および講義資料について復習し、小テストに取り組む				
	13	運動障害性構音障害の評価(問診・観察を通しての理解)					教科書および講義資料について復習し、小テストに取り組む／画像観察から読み取れることレポート				
	14	失語症補助テスト					実技演習に取り組む				
	15	失語症補助テスト／まとめ					実技演習に取り組む				
評価方法	(1)授業の中で小テストを5回実施する。(2)レポートを数回実施する。(3)定期試験(筆記)を実施する。以上を下記の観点・割合で評価する。 成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。										
		言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合				
	定期試験(筆記)	○	○				70%				
	小テスト	○					10%				
	宿題・レポート	○	○				20%				
履修上の注意											

科目名	小児聴覚障害の診断						
科目名(英)							
単位数	1	時間数	30時間	担当者	井上 康子		
実施年度	2021年度	実施時期	後期 I	担当者実務経験	病院にて言語聴覚士として勤務		
対象学科・学年	言語聴覚学科 昼夜間部 1年						
授業概要	聴覚障害および関連障害に関する基本的概念と知識を修得する。						
授業形式	講義:	○	演習:	○	実習:	実技:	※ 主たる方法:○ その他:△
学習目標 (到達目標)	言語 情報	知的 技能	運動 技能	態度 意欲	その他	目標	
	○					コミュニケーションモードについて説明できる	
	○					発達段階に応じた聴覚検査を選択できる	
	○					聴覚検査の手順を説明できる	
	○					本人・家族に評価結果を説明する方法を示すことができる	
	○					模擬ケースカンファレンスで報告する内容を示し、模擬的に報告できる	
テキスト・教材 参考図書	・建帛社 言語聴覚療法シリーズ5 改定 聴覚障害Ⅰ-基礎編 ・建帛社 言語聴覚療法シリーズ6 改定 聴覚障害Ⅱ-臨床編 ・南江堂 聴覚検査の実際 改訂3版						
授業計画	回数	授業項目・内容				授業外学修指示	
	1	聴覚障害児をめぐる社会的文化的背景や医療福祉教育の歴史				授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)	
	2	コミュニケーションモード				授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)	
	3	乳幼児聴覚検査				授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)	
	4	聴覚評価				授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)	
	5	言語発達評価				授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)	
	6	コミュニケーション発達評価				授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)	
	7	認知、社会性、情緒評価				授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)	
	8	面接評価				授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)	
	9	評価演習				授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)	
	10	情報の分析、統合、解釈				授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)	
	11	聴覚保証機器の適応と訓練の適応				授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)	
	12	評価サマリの作成				評価サマリを作成する(1時間)	
	13	統合と分析、治療計画の作成				治療計画を作成する(1時間)	
	14	ケースカンファレンス				授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)	
	15	定期試験と振り返り				講座全体を振り返り、繰り返し学習する(1時間)	
評価方法	(1)レポートを数回実施する。(2)定期試験(筆記)を実施する。 以下を下記の観点・割合で評価する。 成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。						
		言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
	定期試験	○	○				70%
	小テスト						
	宿題・レポート				○		30%
	発表・作品						
履修上の注意							

科目名		知的障害の展開					
科目名(英)							
単位数	1	時間数		45時間	担当者	三田 智巳 ・ 永江 信吾	
実施年度	2021年度	実施時期		後期 I	担当者実務経験	病院にて言語聴覚士として勤務	
対象学科・学年	言語聴覚学科 昼夜間部 1年						
授業概要	知的障害児に対する言語聴覚療法の評価診断、および言語治療（指導・支援）に関する知識、技能、態度を習得する。						
授業形式	講義： ○	演習： ○		実習：	実技： △	※ 主たる方法：○ その他：△	
学習目標 （到達目標）	言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標	
	○	○				知的障害児に対する言語治療における言語聴覚士の役割を説明できる	
	○	○		○		知的障害児に対し、言語聴覚療法の評価診断の基本概念と方法を説明し、模擬的に実施できる	
テキスト・教材 参考図書	医歯薬出版2016 石田宏代・石坂郁代/編 言語聴覚士のための言語発達障害学 第2版 合同出版2019 子どもの発達が気になるときに読む心理検査入門						
授業計画	回数	授業項目・内容				授業外学修指示	
	1	知的障害児の評価診断とは				30分程度の予習・復習を行う	
	2	知的障害児の言語治療（指導・支援）とは				30分程度の予習・復習を行う	
	3	評価診断（評価診断の原則、手続き、情報収集の方法）				30分程度の予習・復習を行う	
	4	評価診断（認知行動面、環境面の情報収集）				30分程度の予習・復習を行う	
	5	言語面の評価（言語理解・表出、コミュニケーション、スピーチ領域）				30分程度の予習・復習を行う	
	6	発達面の評価（遠城寺式乳幼児分析的発達検査）				30分程度の予習・復習を行う	
	7	言語面の評価（LCスケール）				30分程度の予習・復習を行う	
	8	言語面の評価（LCスケール）				30分程度の予習・復習を行う	
	9	言語面の評価（〈S-S〉法言語発達遅滞検査）				30分程度の予習・復習を行う	
	10	言語面の評価（FOSCOM）				30分程度の予習・復習を行う	
	11	言語面の評価（絵画語彙発達検査）				30分程度の予習・復習を行う	
	12	言語面の評価（質問－応答関係検査）				30分程度の予習・復習を行う	
	13	心理検査（WPPSI知能検査）				30分程度の予習・復習を行う	
	14	心理検査（WISC-Ⅳ知能検査）				30分程度の予習・復習を行う	
	15	心理検査（KABC－Ⅱ）				30分程度の予習・復習を行う	
	16	心理検査（KABC－Ⅱ）				30分程度の予習・復習を行う	
	17	心理検査（田中ビネーⅤ）				30分程度の予習・復習を行う	
	18	心理検査（新版K式発達検査）				30分程度の予習・復習を行う	
	19	言語評価、心理検査のまとめ				30分程度の予習・復習を行う	
	20	ケーススタディ（模擬症例の情報収集、評価方法の立案）				グループワークで情報収集、評価計画を話し合う 検査練習（30分）	
	21	ケーススタディ（模擬症例の評価演習）				検査練習（30分）	
	22	ケーススタディ（模擬症例の評価結果のまとめ）				結果のまとめ作成（30分）	
	23	定期試験				講座全体を振り返り、試験対策を行う。（60分）	
評価方法	(1)レポートを数回実施する。(2)小テストを5回実施する。(3)模擬症例のレポート作成。 以上を下記の観点・割合で評価する。 成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。						
		言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
	定期試験	◎	◎				70%
	小テスト	○	◎				15%
	宿題・レポート		◎		○		15%
	発表・作品						
履修上の注意							

科目名	リハビリテーション医学						
科目名(英)							
単位数	1		時間数	15時間	担当者	飯塚病院医師および専任教員	
実施年度	2021年度		実施時期	後期Ⅱ	担当者実務経験	医師及び療法士として病院勤務	
対象学科・学年	言語聴覚学科 昼夜間部 1年						
授業概要	リハビリテーション医療の役割について理解し、その構造を把握する。 また、リハビリテーション医学における関係職種の役割について把握し、チームアプローチの重要性を理解する。						
授業形式	講義:		演習:	実習:	実技:	※ 主たる方法:○ その他:△	
学習目標 (到達目標)	言語 情報	知的 技能	運動 技能	態度 意欲	その他	目標	
	○	○				リハビリテーションの歴史について説明できる。	
	○	○				リハビリテーションの理念と対象について分類でき説明できる。	
	○	○				リハビリテーション関係職種の役割について把握し説明できる。	
	○	○				救命医学の基本概念が説明できる。	
	○	○	○			基本的救命措置が実施できる。	
テキスト・教材 参考図書	参考図書:言語聴覚士テキスト						
授業計画	回数	授業項目・内容				授業外学修指示	
	1	リハビリテーション医学の成り立ち				授業資料を基に復習する	
	2	リハビリテーションの理念と対象				授業資料を基に復習する	
	3	診断と評価 各種疾患の臨床				授業資料を基に復習する	
	4	リハビリテーション医学とリハビリテーションの全体像				授業資料を基に復習する	
	5	チームアプローチの実践				授業資料を基に復習する	
	6	リハビリテーションチーム PT概論				授業資料を基に復習する	
	7	リハビリテーションチーム OT概論				授業資料を基に復習する	
	8	救急救命の実践				授業資料を基に復習する	
評価方法	以上を下記の観点・割合で評価する。 成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。						
		言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
	定期試験(筆記)	◎	◎				35%
	実技			○			20%
	宿題・レポート		○		○		40%
	質問・取り組み				○	○	5%
履修上の注意							

科目名	臨床医学講座Ⅱ						
科目名(英)							
単位数	1		時間数	15時間	担当者	永江 信吾	
実施年度	2021年度		実施時期	後期Ⅱ	担当者実務経験	病院にて言語聴覚士として勤務	
対象学科・学年	言語聴覚学科 昼夜間部 1年						
授業概要	言語聴覚障害および言語聴覚臨床について学修する上で基礎となる人体のしくみ・疾患・ことばの成り立ちに関する知識を修得する。						
授業形式	講義： ○		演習：	実習：	実技：	※ 主たる方法：○ その他：△	
学習目標 (到達目標)	言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標	
	○	○				言語聴覚士の資格に求められる基礎的知識の水準を意識できる。	
	○	○				小項目分類ごとの過去問題から正しい答えを選択できる。	
	○	○				小項目分類ごとの過去問題を解説できる。	
テキスト・教材 参考図書	教科書：医歯薬出版株式会社、2018 大森孝一ほか「言語聴覚士テキスト第3版」 参考図書：国家試験過去問題集						
授業計画	回数	授業項目・内容				授業外学修指示	
	1	言語学				事前に言語聴覚士テキストの該当部分を読み、わからないところをチェックしておく(1時間)	
	2	音声学				事前に言語聴覚士テキストの該当部分を読み、わからないところをチェックしておく(1時間)	
	3	臨床神経科学				事前に言語聴覚士テキストの該当部分を読み、わからないところをチェックしておく(1時間)	
	4	呼吸発声発語系医学				事前に言語聴覚士テキストの該当部分を読み、わからないところをチェックしておく(1時間)	
	5	聴覚系医学				事前に言語聴覚士テキストの該当部分を読み、わからないところをチェックしておく(1時間)	
	6	学習認知心理学				事前に言語聴覚士テキストの該当部分を読み、わからないところをチェックしておく(1時間)	
	7	音響学				事前に言語聴覚士テキストの該当部分を読み、わからないところをチェックしておく(1時間)	
	8	定期試験と解説				定期試験の振り返り学習をすること。(30分)	
	9						
	10						
	11						
	12						
	13						
	14						
	15						
評価方法	1) 定期試験(筆記)を実施する。 成績評価基準は、S(90点以上)・A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。						
		言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
	定期試験	○	○				100%
	小テスト						
	宿題・レポート						
	発表・作品						
履修上の注意							

科目名		聴覚障害の検査										
科目名(英)												
単位数		1		時間数		15時間		担当者		竹松 知紀		
実施年度		2021年度		実施時期		後期Ⅱ		担当者実務経験		言語聴覚士として施設に勤務		
対象学科・学年		言語聴覚学科 昼夜間部 1年										
授業概要		言語聴覚障害および言語聴覚臨床について学修する上で基礎となる聴覚検査の技能を習得する。										
授業形式		講義： ○			演習：		実習：		実技： △		※ 主たる方法：○ その他：△	
学習目標 (到達目標)		言語 情報	知的 技能	運動 技能	態度 意欲	その他	目標					
			○	○			純音聴力検査を模擬的に実施できる。					
			○	○			語音聴力検査を模擬的に実施できる。					
		○	○				中耳と内耳の機能の検査が説明できる。					
		○	○				検査結果を解釈できる。					
テキスト・教材 参考図書		教科書：南山堂、2019 原晃(監)「聴覚検査の実際 改定4版」										
授業計画		回数	授業項目・内容						授業外学修指示			
		1	純音聴力検査 気導聴力 上昇法						レポート①純音聴力検査の行い方をA4 用紙一枚にまとめる(30分)			
		2	純音聴力検査 骨導聴力 マスキング						検査の練習を行うこと(30分)			
		3	語音聴力検査						レポート②語音聴力検査の行い方をA4用紙一枚にまとめる(30分)			
		4	インピーダンスオージオメータ						検査の練習を行うこと(30分)			
		5	内耳機能検査						検査の練習を行うこと(30分)			
		6	聴覚検査演習						検査の練習を行うこと(30分)			
		7	検査結果の解釈						レポート③純音聴力検査以降、結果によって選択される検査をわかりやすくまとめる(30分)			
		8	実技試験						実技試験を振り返り、繰り返し練習をする(1時間)			
		9										
		10										
		11										
		12										
		13										
		14										
		15										
評価方法		(1)授業の中でレポートを3回実施する。(2)定期試験(実技)を実施する。(3)授業時の質問や取り組み以上を下記の観点・割合で評価する。 成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。										
			言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合				
		定期試験(実技)		◎	◎			70%				
		小テスト										
		宿題・レポート		○		○		20%				
		質問・取り組み				○	○	10%				
履修上の注意												

科目名	言語聴覚臨床の評価診断						
科目名(英)							
単位数	1		時間数	30時間		担当者	星子 隆裕・永江信吾
実施年度	2021年度		実施時期	後期Ⅱ		担当者実務経験	病院にて言語聴覚士として勤務
対象学科・学年	言語聴覚学科 昼夜間部 1年						
授業概要	言語聴覚療法の評価診断の基本的概念・技能・態度を修得する。						
授業形式	講義:	○	演習:	△	実習:	実技:	※ 主たる方法:○ その他:△
学習目標 (到達目標)	言語 情報	知的 技能	運動 技能	態度 意欲	その他	目標	
	○	○				言語聴覚療法の評価診断における基本的概念を説明できる。	
		○	○			コミュニケーション行動を観察する視点を説明できる。	
	○	○				評価診断結果をサマリにまとめる枠組みを説明できる。	
	○	○				言語聴覚障害を総合的に評価し鑑別診断する方法を説明できる。	
		○	○			言語聴覚療法を総合的に評価し鑑別診断する方法を模擬的に実施できる。	
テキスト・教材 参考図書	なし						
授業計画	回数	授業項目・内容				授業外学修指示	
	1	初回面接において情報を得るための3つのコツ				3つのコツを用いて演習を3名の方と行い、感想を記録する。(30分)	
	2	測定と観察法はどちらが優れているのか				信頼性と妥当性について調べる(30分)	
	3	実践 観察法				観察レポートを記載する(40分)	
	4	スクリーニング検査の構成				スクリーニング検査の項目が何を測定しようとしているのかをまとめる(30分)	
	5	STADの構成				STADの手順を学習する(30分)	
	6	実践 STAD				OSCEに向けて練習をする。(60分)	
	7	評価の目的を再確認する				授業資料を振り返り学習をする(30分)	
	8	バイタルサインの測定				OSCEに向けて練習をする。(30分)	
	9	成人分野のサマリの作り方				授業資料を振り返り学習をする(30分)	
	10	小児分野のサマリの作り方				授業資料を振り返り学習をする(30分)	
	11	ADLの評価法				授業資料を振り返り学習をする(30分)	
	12	QOLやその他の評価法				授業資料を振り返り学習をする(30分)	
	13	理学療法の評価法				授業資料を振り返り学習をする(30分)	
	14	作業療法の評価法				授業資料を振り返り学習をする(30分)	
	15	OSCE				評価を基に練習をする(30分)	
評価方法	(1)OSCEを実施する。(2)レポートを3回実施する。 以下を下記の観点・割合にて評価する。 成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。						
		言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
	定期試験						
	小テスト						
	宿題・レポート	○	○				40%
	発表・作品						
	OSCE		○	○			60%
履修上の注意							

科目名	高次脳機能障害の理解						
科目名(英)							
単位数	1		時間数	30時間	担当者	東納 嘉寛	
実施年度	2021年度		実施時期	後期Ⅱ	担当者実務経験	病院にて言語聴覚士として勤務	
対象学科・学年	言語聴覚学科 昼夜間部 1年						
授業概要	高次脳機能障害の基本的概念と知識を修得し検査を実施できる。						
授業形式	講義: ○		演習: △	実習:	実技:	※ 主たる方法:○ その他:△	
学習目標 (到達目標)	言語 情報	知的 技能	運動 技能	態度 意欲	その他	目標	
	○	○				高次脳機能障害の評価診断の基本概念と方法を説明し、模擬的に検査を実施できる。	
	○	○				言語聴覚療法の評価診断の手続きを説明できる。	
テキスト・教材 参考図書	教科書:医歯薬出版株式会社 原 寛美・高次脳機能障害ポケットマニュアル 第3版						
授業計画	回数	授業項目・内容				授業外学修指示	
	1	評価の流れ 原則・手続き・情報収集・鑑別診断とは				授業の復習を30分行う。	
	2	脳画像検査 基本				授業の復習を30分行う。	
	3	高次脳機能障害の検査 各論 コース立方体組み合わせテスト				授業の復習を30分行う。	
	4	高次脳機能障害の検査 各論 レーヴン色彩マトリックス検査				授業の復習を30分行う。	
	5	高次脳機能障害の検査 各論 HDS-R、				授業の復習を30分行う。	
	6	高次脳機能障害の検査 各論 MMSE-J、CDR				授業の復習を30分行う。	
	7	高次脳機能障害の検査 各論 COGNISTAT 認知機能検査、MoCA-J軽度認知障害スクリーニング等				授業の復習を30分行う。	
	8	高次脳機能障害の検査 各論 記憶機能検査(S-PA、三宅式記銘検査)				授業の復習を30分行う。	
	9	高次脳機能障害の検査 各論 記憶機能検査(S-PA、三宅式記銘検査、WMS-R、リバーミード行動記憶検査、等)				授業の復習を30分行う。	
	10	高次脳機能障害の検査 各論 記憶機能検査(WMS-R、)				授業の復習を30分行う。	
	11	高次脳機能障害の検査 各論 記憶機能検査(リバーミード行動記憶検査、等)				授業の復習を30分行う。	
	12	高次脳機能障害の検査 各論 注意機能検査の検査(TMT-J、BIT)				授業の復習を30分行う。	
	13	高次脳機能障害の検査 各論 注意機能検査の検査(BIT)				授業の復習を30分行う。	
	14	高次脳機能障害の検査 各論 注意機能検査の検査(CAT)				授業の復習を30分行う。	
	15	高次脳機能障害の検査 各論 注意機能検査の検査(CAT等)				授業の復習を30分行う。	
評価方法	成績処理方法:定期試験(筆記実技)を実施する。 以上を下記の観点・割合で評価する。 成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。						
		言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
	定期試験	○	○				100%
	小テスト						
	宿題・レポート						
	発表・作品						
履修上の注意							

科目名	運動障害性構音障害の展開										
科目名(英)											
単位数	1		時間数	30時間		担当者	灘吉 享子				
実施年度	2021年度		実施時期	後期Ⅱ		担当者実務経験	病院にて言語聴覚士として勤務				
対象学科・学年	言語聴覚学科昼夜間部 1年										
授業概要	①運動障害性構音障害についての基礎的な知識を理解するとともに、その知識を診 断・治療に生かしていくことができる。②専門家として必要な態度について理解し、実行することができる。③能動的に授業参加することができ、積極性をもって遂行することができる。										
授業形式	講義： △		演習：		実習：		実技： ○		※ 主たる方法：○ その他：△		
学習目標 (到達目標)	言語 情報	知的 技能	運動 技能	態度 意欲	その他	目 標					
	○	○				運動障害性構音障害のタイプごとの発生機序および症状について説明できる。					
	○	○	○	○		運動障害性構音障害における検査についてマニュアルを使用せず実行することができる。					
	○	○				検査結果をもとに発生機序の仮説を立てながら診断することができる。					
	○	○				それぞれ症状について発生機序にあわせた訓練立案ができる。					
	○	○	○			訓練手技について目的を説明することができ、遂行することができる。					
テキスト・教材 参考図書	西尾正輝著ディサースリア臨床標準テキスト 医歯薬出版株式会社 廣瀬 肇ら著運動障害性構音障害学 医歯薬株式会社 西尾 正輝 著ディサースリア検査 インテルナ出版										
授業計画	回数	授業項目・内容					授業外学修指示				
	1	講義概要、演習の進め方について タイプごとの病態特徴と重症度のま とめ					該当する教科書の内容をもとに前期内容の振り返り をしておく				
	2	言語病理学的鑑別診断・問診・スクリーニングテスト					教科書および配布資料をもとに復習し自主演習をし ておく				
	3	ディサースリアの臨床で行う標準的検査の概要(説明) 構音検査(実技演習)					自主演習をしておく				
	4	標準ディサースリア検査結果の解釈の仕方(実技演習)発話の検査・呼吸機能 標準ディサースリア検査結果の解釈の仕方(実技演習)発声機能・鼻咽腔閉鎖機					教科書および配布資料をもとに復習し自主演習をし ておく				
	5	標準ディサースリア検査結果の解釈の仕方(実技演習)口腔構音機能 標準ディサースリア検査結果の解釈の仕方(実技演習)口腔構音機能					教科書および配布資料をもとに復習し自主演習をし ておく				
	6	運動障害性構音障害の評価、検査結果のまとめ方					教科書および配布資料をもとに復習し自主演習をし ておく				
	7	検査実技テスト:2人一組にて、テスト概要については事前に説明しま す。					テストの振り返りをもとに自主演習をしておく				
	8	症例を通して検査演習(結果から症状を検出する)					教科書および配布資料をもとに復習し自主演習をし ておく				
	9	問題点の抽出および訓練立案について(グループにわかれ担当症例について)					グループごとに内容を深めておく				
	10	運動障害性構音障害の訓練法(発声発語器官運動へのアプ ローチ)					教科書および配布資料をもとに復習し自主演習をし ておく				
	11	運動障害性構音障害の訓練法(発声発語へのアプローチ)					教科書および配布資料をもとに復習し自主演習をし ておく				
	12	運動障害性構音障害の訓練法(タイプごとのアプローチ)					教科書および配布資料をもとに復習し自主演習をし ておく				
	13	運動障害性構音障害の訓練法(訓練の立案と実施)					教科書および配布資料をもとに復習し自主演習をし ておく				
	14	訓練実技テスト・症例レポートの考察課題①					実技テストを振り返り自主演習をしておく 考察内容を振り返り内容を深める				
	15	症例レポート考察課題②・まとめ					考察内容を振り返り内容を深める				
評価方法	(1)授業の中で小テストを5回実施する。(2)レポートを数回実施する。(3)定期試験(筆記・実技)を実施する。 以上を下記の観点・割合で評価する。 成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。										
		言語情報		知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合			
	定期試験(筆記)	○		○				50%			
	実技テスト	○		○	○			30%			
	小テスト・レポート	○		○				10%			
	レポート	○		○				10%			
履修上の注意											

科目名	摂食嚥下障害の理解						
科目名(英)	Understanding dysphagia						
単位数	1		時間数	30時間	担当者	八木 智大	
実施年度	2021年度		実施時期	後期Ⅱ	担当者実務経験	病院にて言語聴覚士として勤務	
対象学科・学年	言語聴覚学科 昼夜間部 1年						
授業概要	摂食嚥下障害について基本的な概念を学びます。また、摂食嚥下障害によって引き起こされる合併症や関連障害が私たちの生活に与える影響について具体的に想像できるだけの知識を獲得します。嚥下障害や関連障害に対する訓練や支援方法を立案する為に、病態の評価方法や基本的技法を説明できるようになります。						
授業形式	講義: ○		演習:	実習:	実技: △	※ 主たる方法:○ その他:△	
学習目標 (到達目標)	言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標	
	○	○				摂食嚥下に対するリハビリテーションの目的を説明することができる。	
	○	○				摂食嚥下に関与する神経、筋を含む構造を説明できる。	
	○	○				健常人における摂食嚥下モデルを説明することができる。	
	○	○				摂食嚥下障害に対する基本的な評価技法を口頭で説明することができる。	
		○		○		自らの考えをグループワークや個別課題の中で表現することができる。	
テキスト・教材 参考図書	教科書: 医歯薬出版株式会社、2017 藤島一郎ほか「脳卒中の摂食嚥下障害 第3版 web動画付き」 医歯薬出版株式会社、2018 聖隷嚥下チーム「嚥下障害ポケットマニュアル 第3版」						
授業計画	回数	授業項目・内容				授業外学修指示	
	1	嚥下障害総論～オリエンテーションと嚥下器官を描けるようになる～				教科書の該当部分を復習する。資料を基に嚥下器官の構造を図示できるようになっておく(1時間)	
	2	嚥下のメカニズムを学ぶ ～嚥下モデルについて～				教科書の該当部分を復習する。(30分)	
	3	嚥下のメカニズムを学ぶ ～嚥下に関わる筋肉について～				教科書の該当部分を復習する。(30分)	
	4	嚥下のメカニズムを学ぶ ～嚥下に関わる神経について～				教科書の該当部分を復習する。(30分)	
	5	摂食嚥下障害の原因と病態を学び列挙することができる。				教科書の該当部分を復習する。(30分)	
	6	脳卒中による嚥下障害を学び病態の特徴を説明できるようになる				教科書の該当部分を復習する。(30分)	
	7	摂食嚥下障害に影響する関連障害を説明できる。				教科書の該当部分を復習する。グループで第7回までの内容についてレポートにまとめる(1時間)	
	8	クラスメートに教えよう ～レポートを基にクラス全員に授業を行う～				クラスでそれぞれまとめたレポートを基に復習を行なう。	
	9	摂食嚥下障害の評価 ～観察と簡易評価～				教科書の該当部分を復習する(30分)	
	10	摂食嚥下障害の評価 ～精密検査～				教科書の該当部分を復習する(30分)	
	11	検査結果のデータから嚥下障害を評価する				教科書の該当部分を復習し、評価記録を読めるようになる(1時間)	
	12	嚥下のスクリーニング評価を体験してみよう				教科書の該当部分を復習し、クラスメートと模擬演習を行う(1時間)	
	13	摂食嚥下障害に影響する心理・社会的問題を説明できる。				教科書の該当部分を復習する(30分)	
	14	模擬症例の情報をまとめ嚥下障害を評価することができる。				教科書の該当部分を復習する(30分)	
	15	国家試験問題を通して前期授業の内容を振り返る。				前期授業の内容を振り返り後期授業に備える。	
評価方法	(1)授業の中で小テストを10回実施する。(2)課題の提出を2回実施する。(3)定期試験(筆記)を実施する。以上を下記の観点・割合で評価する。 成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。						
		言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
	定期試験	◎	◎				60%
	小テスト	◎	◎				30%
	レポート課題	○	○		○		10%
履修上の注意							

科目名	成人聴覚障害の診断							
科目名(英)								
単位数	1		時間数	30時間		担当者	星子 隆裕	
実施年度	2021年度		実施時期	後期Ⅱ		担当者実務経験	病院にて言語聴覚士として勤務	
対象学科・学年	言語聴覚学科 昼夜間部 1年							
授業概要	聴覚障害に対する言語聴覚療法の評価診断および言語治療に関する知識・技能・態度を修得する。							
授業形式	講義: ○		演習: ○		実習:	実技:	※ 主たる方法:○ その他:△	
学習目標 (到達目標)	言語 情報	知的 技能	運動 技能	態度 意欲	その他	目標		
	○					成人聴覚障害の評価について概説することができる		
	○					補聴器、人工内耳の適応例を挙げることができる		
	○					評価サマリを作成することができる		
	○					模擬ケースカンファレンスにて模擬的に報告することができる		
	○					聴覚情報補償について説明できる		
テキスト・教材 参考図書	教科書:医学書院2020 藤田郁代(監)「標準言語聴覚障害学 聴覚障害学 第2版」							
授業計画	回数	授業項目・内容				授業外学修指示		
	1	成人聴覚障害の評価概論				授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)		
	2	面接による評価				授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)		
	3	聴力検査の選択				授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)		
	4	包括的聴力評価				授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)		
	5	コミュニケーションの評価				授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)		
	6	心理社会的側面の評価				授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)		
	7	聴覚補償機器				授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)		
	8	補聴器・人工内耳の適応と評価				授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)		
	9	中枢性聴覚障害				授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)		
	10	機能性聴覚障害				授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)		
	11	情報補償				授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)		
	12	評価サマリの作成				評価サマリを作成する(1時間)		
	13	統合と分析、治療計画の作成				治療計画を作成する(1時間)		
	14	ケースカンファレンス				授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)		
	15	定期試験と振り返り				講座全体を振り返り、繰り返し学習する(1時間)		
評価方法	(1)レポートを数回実施する。(2)定期試験(筆記)を実施する。 以下を下記の観点・割合で評価する。 成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。							
		言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合	
	定期試験	○	○				70%	
	小テスト							
	宿題・レポート				○		30%	
	発表・作品							
履修上の注意								

科目名	臨床実習 I										
科目名(英)											
単位数	1		時間数	40時間		担当者	永江 信吾				
実施年度	2021年度		実施時期	後期 II		担当者実務経験	言語聴覚士として病院に勤務				
対象学科・学年	言語聴覚学科 昼夜間部 1年										
授業概要	修得した知識・技術・態度を統合して言語聴覚療法の役割・職務を理解し、対象児・者の特徴と問題を把握できる。										
授業形式	講義:		演習:		実習:	○	実技:	※ 主たる方法:○ その他:△			
学習目標 (到達目標)	言語 情報	知的 技能	運動 技能	態度 意欲	その他	目標					
				○		職業人としての態度・マナーを保ち行動ができる					
				○		臨床実習に主体的かつ積極的に取り組むことができる					
			○			対象児・者と共感を持ってコミュニケーションをとることができる					
		○		○		必要な情報を収集することができる					
				○		施設の機能・特徴について理解できる					
テキスト・教材 参考図書	なし										
授業計画	回数	授業項目・内容					授業外学修指示				
	1	臨床実習期間 2022年3月14日～3月18日									
	2										
	3										
	4										
	5										
	6										
	7										
	8										
	9										
	10										
	11										
	12										
	13										
	14										
	15										
評価方法	臨床実習指導者が学校の定める成績評価の基準によって評価した、実習成績報告点6割 臨床実習期間中における学校評価項目による、評価点を4割										
		言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合				
履修上の注意											